

『ジャン・パロワ』小論

——「誠実の実践」をテーマに——

序 章

フランスに於いてトルストイが紹介されてから、ドストエフスキーが紹介されるまで、そこには可成りの年数が経っている。このことをジッドは、一つにドストエフスキーの悪文とまで称される文体の故、又一つに最初の紹介者の見識の不足の故としている。しかしひとたびドストエフスキーの全作品がフランス読者の心把えはじめるや、そこにはジッドの執拗な呼びかけ等もあって、ドストエフスキー的世界観が一九一〇年代以降、一つの文学的底流とまでなるに至った。一方トルストイは、多くの読者を維持しながらも、あくまで読者の意識下のところで解消されて、問題意識となることは稀であった。その稀な例がロマン・ロランであり、ロジエ・マルタン・デュ・ガールであることを我々は知っている。

小説「ジャン・パロワ」が一九一三年、N・R・Fより出版された時、著者マルタン・デュ・ガール宛に多くの著名人（アラン、レミイ・ド・グールモン、シユアレス、ペギー等）から共感の手紙が

広 田 正 敏

寄せられた。又一般読者に関しては、ルネ・ラルーの証言によると、「私の知る所では、この五百ページのジャン・パロワなる書物は、一九一四年の七月までにそれを読了していた若い人々の全てに、速やかにして深い感銘を与えた」という。これについて直ちに想起せられることは、ロマン・ロランが「半月手帳」（ペギー主幹）に連載した「ジャン・クリストフ」の、あの大きな反響である。もとよりこの二つの作品には、スタイルの点に於いても、内容的にも共通性は乏しいのであるが、二人の偉大な作家の真摯な創作態度、及び生涯堅持した理想的反戦主義思想の中に、我々は共感と畏敬の念を覚えるし、さらに現代フランス文学史に於いて、あまりに異端視され、偏見をもつて斥けられる彼等の地位には大きな疑問を持つのである。我々は、ドストエフスキーの投じた陰惨でダイナミックな波紋の蔭に、清朗で静かな世界を知るのであろう。それは、この両作家に於ける単一性、純粋性、リリスムに帰因すると思える。蓋し、トルストイの風土に培われた精神が、ドストエフスキーの自我分裂のテーマを排除して、人間を限りなく愛し、それを描きつゝ、

一つのフォルムの完成に志向したということとはうなずけるのである。

X X

ロジェ・マルタン・デュ・ガールの作品を通して流れる一貫した文学的テーマは「誠実の実践」ということである。主人公たちは自分に与えられた可能性をその究極まで推しすすめる実行力をもっている。懷疑から殆して、自己の真実の道の撰択、そして行動へと、彼らは誠実の努力を惜まない。最後に来るものが弛緩——悲劇的ともいえる精神の弛緩——であるにしても、又、主人公の個性の破壊であるにしても、我々読者はそれを悲惨であると思うことはなく、むしろ充実した一つの人生に対し、ほのぼのとした共感と是認を感じるのである。何故なら、マルタン・デュ・ガールの主人公たちは決して超人ではなく、我々の中に見出し得る人間、そして理想化された「誠実の実践者」というエキスを除けば、我々そのものであるのだから。

しかし、「何よりも先づ構成だ」と確言する彼の作品があまりにもゆるぎなきものであり、主人公たちの「実践の方法」があまりに定式化されているところに、ジッドの譬喩を借りれば、直線的な脆さと変化の乏しさを感じる読者もあるであろう。我々はしかし、構成の単調さの中にこそ彼の真意を汲むべきである。主人公の誠実は彼のそれであり、彼は主人公を通して自己の問題意識を表明する。主人公が彼に同化されるためには、もはや一つの構成しか必要でない——即ち単一性。そこに於いてこそ彼のナチュラリスト的手法が完全に発揮されるのである。

マルタン・デュ・ガールの問題意識は常に「青年の危機」という

ことであり、不条理な状況の中で、自己に誠実たらんとする青年が如何に努力し、反抗するかを綿密に描いてゆく。「ジャン・パロワ」、「オールドル」、「法皇庁の抜穴」等一連の小説群が提示する青年の生き方は、一次大戦前夜の社会状況を多かれ少かれ反映させた危機感の上にたつものである。社会の把握の仕方について、これらは共通したテーマを担っていると思える。そしてとりわけ真実の把握、反抗の様式に於いてマルタン・デュ・ガールは、カミュの述べる如く「(或る意味でジッド、ヴァレリより以上に)現代文学を予言した恐らく唯ひとりの人間」なのである。

X X

私はこの小論に於いて、「ジャン・パロワ」の他の問題に言及しない。ただ、小説であるに拘らず彼が採用した対話形式は、「回想」に語られているように、彼の劇作に対する深い関心を示し、ドキュメントの多いこの作品をより生々しいものにするに効果的であったことを述べておきたい。

本稿の目的は、反抗の人間としてのジャン・パロワの反抗型式を誠実という抽象的な理念に基いて吟味することにある。尚末尾にその梗概を附記した。(引用・山内義雄訳「ジャン・パロワ」より)

本 論

「誠実」の概念はきわめて捉え難いものである。それは一つの闘いであるに違いない、何に基づく闘いであろうか。今、逆の概念即ち「不誠実」ということを考えてみる。不誠実は何よりも先ず自己

に対する虚偽である。それは単に虚偽であるに止らず、虚偽の対象である自己を否定する。自己否定的な方向へ向うことが不誠実の根本であり、勇氣・闘志・執着の逆の性格をもつものである。それは現状維持の視点に立つて、最終的には諦念と結びつく。不誠実が自己否定的なものであるに拘らず、それは決して破壊的なものではない。既成の環境・習慣の中で生きる人間にとっては、順応の方向がむしろ望ましい生き方なのである。彼にとって、無意識的に自己の方向が決定されている場合、そこには何ら矛盾の感覚が生じない。それを当然のこととして順応してゆく人間は、不誠実の観念すら目覚めてこぬであろう。逆に云えば、それは、誠実な行為であり、「誠実」以前の誠実（低次元の誠実）である。「不誠実」という概念も「誠実」との対比に於いてはじめて知り得るものである。

互いの欲求をできる限り充足し合うという意味での誠実は、恐らく人間の集団生活の当初より存在したであろうが、真の意味での「誠実」ということが取り上げられたのは自由主義の発生に伴ってである。或いは自由主義の根底に「誠実」の理念が存在すると言う方が正しい。自由主義の歴史は自己の発見・解放の歴史であり、環境なくして存続し得ない人間が既存の環境を否定的に看つめた時、はじめて把握せられる「自己」の主張の歴史である。環境と相容れなくなった個人は、自己の確立を目的として、既存の環境を否定しないしは破壊し、自己に適応した環境を新しく作りだそうと試みる。自由主義は先ず否定的であるに拘らず、生活のバランスを回復するという行為に於いて自己肯定的なものである。そして「誠実であること」がその行為の源動力となる。何故なら「誠実」はその根源に、自己の信念、或いは自己の欲求に忠実であろうとする意志を潜めて

いるのだから。

誠実は、不誠実と共に、自己の認識の上にはじめて成立する概念である。そして動的に把えるならば、「誠実」は二つの機能——真実（或いは自由）の把握、及びその維持——をもっていることが知られよう。「誠実」が闘いである所以は、真実がしばしば既されて居り、真実の維持に多大の困難が伴うということのみならず、環境的動物である有限的な人間の生存に於いて、「完全な自由」の獲得という、神の座に自らを据えようとする行為そのものにある。したがって誠実の闘いは尽きざる闘いであり、永劫の回帰作用を課せられている。ジッドのナルシスが永遠の自己凝視を余儀なくされ、「またもとの黙阿弥だ」と喚くパリウドの主人公は歯車のように回転することを止めない。その時、彼らの行為を是認させるものは、「到達することなしに、肝心なのは到達に向けての努力なのだ」（レッシング）ということばに集約されていると思う。

誠実の第一の機能——真実を把握すること——に於いて人は懷疑的となる。その懷疑は既成の秩序と自己とを対立させるために生れるというよりも、むしろその秩序に従順であろうとする本能的な作用と、その秩序に認められるさまざまな矛盾・不合理に反撥する理性の作用との対立によって生れる。人は「懷疑にあつての誠実」の故に苦悩するのである。第二の機能——真実の維持——に於いて、人は文字通り闘争的となる。「敢然として自己であること」（ジッド）はその闘いが孤独なものであることを充分に示しているのである。その孤独な闘いに於いて、徹底した個人主義を貫いたのがジッドであるならば、視野を広くし、或る意味で連帯性を附加しようとして試みたのがマルタン・デュ・ガールであったと言えるであろう。

マルタン・デュ・ガールが最初の作品（Devenir I）の主人公に言わしめていることば、*「Ah, devenir enfin un homme utile! Devenir!」*は「有用な人間になること」の意志の中に、「自己への誠実と他者への誠実（決してリヴェール流の誠実ではない）」とを融合させようと努力していることを示すものである。それは主に第二の機能に於いてなされる。したがってマルタン・デュ・ガールは、ジッドがシニスムへ移行した同じ地点から、「他者への誠実」の問題を展開させてゆくのである。

X X

「敢然として自己であること」その意味で主人公ジャン・パロワが、闘病の過程に於いて、またカトリシスムから脱皮してゆく過程に於いて、孤独な闘士であったことは、彼に「誠実」たるべき資格が与えられていたことを示す。闘病は自然の闘いであり、矛盾・躊躇いは許されない。それは誠実以前の誠実な行爲である。

父「…癒ろうとさえ思えばいいんだ。…生きるということは、どこからどこまで戦いだ。生きていくということは、それは勝ちつづけるということなんだ。」（*Oeuvres complètes pléiade I P. 216*）

父「…ジャン、生きるんだ。きちがいのように夢中になって、そしてどこまでも執念ぶかく…」（*P. 217*）

ジャンは激しい衝動を感じ、「生きる意志」をもつ。栄養、空気が、休息——父の指示に従って、彼の闘病生活が始まるのである。

彼が闘病生活で体得した闘志は、長じて自然科学を修めた彼の、カトリシスムとの対決に大きな力となる。彼の懷疑は夙に十五才頃から始まっている。

ジャン「昔は落ち着いた宗教生活をもっていました。ところがいま、何から何まで理解しようと思ひ、しかも理解できずにいるのです。…たとえば、絶対それを犯すまいと心に誓っているあたりまえの罪の問題；ところが習慣の方が神様よりも強いです！」

ジョジュエ司祭「…宗教的な気持を絶えず動揺させるところのもの、それを絶対避けるようにしなければ。」

ジャン「そうなんです。でもなせ僕は負けそうな気持になるのでしやう？」（*P. 220—221*）

ジャンは、司祭が「論破されつくした悪の抗議」と呼ぶ問題にくだり下がる。彼は公式的な司祭の論駁に満足できず、自分は自由思想家になるかも知れぬと考える。後に述懐する如く、彼は「こうした天啓による宗教では、すべてが明らかにされるものでない」ことを悟りはじめるのである。既に理性が目覚め、理性的な考え方が彼の信仰をおびやかす、彼に信仰による平穩を与えない。懷疑というものは、「ただ頭を振って否定してしまえる罪ふかい空想とちがつて、真実とおなじく、執拗な、有無を言わさぬ偏執觀念であり、それは信仰の奥底を突き刺して、一滴一滴それを溜らしてしまふ針のようなものである。」（*P. 262*）ジャンは懷疑が安直に否定し得ないものであることを知る故に、誠実な態度で思索し苦しむのである。自分にとって何が真実であるかをみきわめることが必要なのである。不安の気持は彼の思索を促す力となっている。彼はどちらかに安住したいのである——宗教的感情か、科学主義か。しかし懷疑する彼にとってはこの二つの要素——理性に従う彼と信仰の呼び覚ます感興に従う彼——はどちらも真実に違いない。ジャンは懷疑にあつて誠実たらんとし、教義の意味と理性とが相容れる点を執拗に探る

決心をする。彼が一つの矛盾命題、例えば、「神は創世にあたって完全無欠な世界を創り給うたのに、何故ヘビが居たのか」というような矛盾にとらわれている限り、彼に飛躍を望むことはできないであろう。信仰は矛盾を越えたもの、生活の根底にある感情なのである——「もし宗教がなかったら、僕には：根が土からあがつてしまっている、全然栄養のとれなくなつた一本の木にすぎますまい」(P. 237) 彼に残された方法は教義を「自分の心の状態に従つて、自分に適当したような解釈をくだし、それを自分の必要とするところに従つて用いる」という妥協的な信仰の道である。しかしジャンにとつてそれで得た平安もみせかけにすぎない。いつも「無意識な反動」に責められるのである。

カトリシスムとの対決に於いて、長い懷疑の時期を通過した彼が最後に自らに提示する問題は、自己を確立するか放棄するかという最も根本的なそれである。「象徴的解釈」による信仰が自己に対する虚偽であると悟つた彼は、「誠実」の名にかけて躊躇することなく信仰を棄て去る。彼が宗教を矛盾の総合、不条理を内在させる既成の秩序として意識しはじめるや、それは、彼が嘗てたち向つた病弊の如く、強烈な反抗の対象となるのである。彼はシエルツ司祭が「精神の無秩序状態」と呼ぶところに、自己の自由主義思想に基く秩序を確立しようと決意する。彼の徹底した理性は、自己の行為がゆるぎなき「誠実」の上になつたと信じられるまで、分析することを止めない。それ故、自己の宗教的過去と宗教的家庭とを犠牲にしてジャンが獲得した自由は彼にとつて真実なのである。

× ×
真実の維持ということがこの時より始まる。それはもはや自己内

部の問題であるに止らず、実践として外へ向けて侵透してゆく行為である。「誠実」のテーマに戻つて考えるならば、それは「自己への誠実」を「他者への誠実」と融和させようとする行為と言えるだろう。決して自己への誠実を他者に強いるのではなく、自己内部での真実を伝達することによつて、他者の内部に同じ真実を生せしめようとする。ジャンの「誠実」は真実の伝達という行為に於いて具現されるのである。ジョジェ司祭が恐らく別の目的のために言つた次のことは、ジャンにとつての行動規範となつている——

「：神さまから、小さな宝を、普通よりもすぐれた才能をおあずかりしたといつた場合、君としてはそれを実らせなければ。と共に、あくまで全人類をしてそれを利用させるようにしなければ。才能を空しく押れさせるような人になつてはいけない。自分を豊かにすること。だがそれは人にも分けてやるためにだ。おのれを与える人にならなければ」(P. 223)

懷疑を抜け出したジャンは闘うことに於いてリュスより直截な人間である。彼にはもはや成長することが止つて了つてゐる。彼が挑戦する相手は根拠をもつた真実を受け容れない人々である。躊躇も寛容もなく、彼の闘いは徹底してゐる。

リュス「われらは、すべて独自の才能をもつてゐます。われらはそれによつて他のものと区別されるわけです。：ほかのものなどには目もくれず、ただそれのみ昂揚するようなならなければ」

ジャン「しかし、それは自己を限定することになりますまいか？
むしろ反対に、できるだけ自己の外へ出るようにすべきではありませんまいか？」

リュス「わたしは、飽くまでも自己を守るべきだと思います。た

だし飽くまでも成長すること。」(P. 341)

「逞しい個性をもった人であるかぎり、どんなときでも自己をあらわすものだ」と言うリュスはきわめて人間的に人生を愛し生活を愛する(「人生……じつに美しいですな……」)そして自己の成長に向けて努力している。だが十五才年少のジャンは既に自己を全ゆる絆から解放し、闘い以外に何も存在しない世界に身を置いているのである。だから、ドレフェス事件の真相を知った二人が交わす対話はその対照をよく示している。

リュス「不正な判決を、それが軍によって、また政府によって、同時にまた——世論によって熱狂的な支持をうけたという事実によって甘受しなければならぬのか? あるいはまた、証拠を振りかざし、裁判上のあやまりを攻撃し、大疑獄を捲きおこし、そして決然、革命家とでもいったように、国家として形成されているこの秩序にたいし、この神聖な機構のすべてにたいし、真正面からぶつかってゆくべきか!」

ジャン「躊躇すべきではありません!」(P. 369)

ジャンはリュスの苦悩を思考の一過程として眺め、是認している。だから彼は清澄な、不安のない気持でリュスの決意を待つ。彼自身の決心は真実であればそれを伝達するという事であり、予想される全ゆる困難は問題とされない。

リュス「パロワ君、決然たる態度にでようとするあなたの熱意の中には、たとえば個人感情とでもいったものがありはしないでしょうか? ……つまり個人的な満足感、復讐とでもいったような……」

ジャン「そうなのです。…旧習とか、独裁主義とか、あらゆる高貴なもの、誠実なものへの無関心とか! おお、われらの信念こそ

は……なんと美しいものでしょう!」(P. 369—370)

再裁判の第一回で敗れた同志たちを上げますのはジャンである。彼の信念は決して変ることがない。「僕は真実というものの否応なしの力を信じています。勇気をふるい起さなければ!」彼は現実の醜悪・狂暴・不正から目を外らすことをしない。彼は確信している——「虚偽はおそかれ早かれ人生自身のなかにおいてその罰を見出すものだ」

X X

ジャンに於ける誠実の実践——今やそれを「反抗」ということばに置き替えることができるであろうが——の方法(型)は非常に簡単なものである。懷疑を通して彼は自己の「誠実」の認識を「誠実以前の誠実」(低次元の誠実)にまで還元することばを替えば彼は自己の反抗を本能的な、肉体的な分野で自然発露の状態によって遂行する。カトリシスムに対する反抗も、ドレフェス裁判に対する反抗も、その際の彼の態度は幼少時に病に対処した時の、あの肉体による抗議と等価的なものである。現実の弊害を凝視する彼の眼は、全てを平面上に押しつけて了うのである。彼にとって、それがどのような形態をとろうとも、悪が存在すること自体が許せないのである。彼の現実把握は常に自己との対比に於いてなされ、自己にとって真実でないものは不正であると見做すというドライな性格をもっている。

真実は常にどこかに存在しているにも拘らず、そしてドレフェス事件に於いてきわめて具体的な形で示されたにも拘らず、それは個々の人間によって把握され維持されてゆくものである。したがって真実は「自己にとっての真実」という意味で相対的な認識でしか

い。また、誠実は「欲すること即得ること」という、フラストレーションの介入を許さない自己矛盾的理想を最終目的としてしている。動物と神との中間に立つて、環境にしばらくながらも自己を神に近づけようとする行為は所詮徒勞に終るものであろう。ジャンの現実把握・反抗がいかに直截であり、限界線すれすれにまで推しつめられたものであるにしても、誠実の根本的な意味に於いて「誠実」であることは不可能である。それをジャンは知らないのであらうか。少くとも著者マルタン・デュ・ガールはそれを熟知している。晩年のジャンを観察するレヴィー神父は言う——「わたしはその顔から目をなすことができなかった。ああした生活の情熱が、ついにここまで迫りついたというわけなのか！ それは、人生半ばにして彼を見棄てた、この病み衰えた肉体によつて裏切られて……。そしてまた、手のとどかないような目的へと、彼を駆り立てた思想によつても裏切られて……。何から何まで裏切ったのだ！」(P. 543)

X X

「誠実の実践」は尽きざる闘いである。しかし肉体の衰えと共に、人間には精神の弛緩が訪れる。ジャンの最後の反抗は死に対する反抗であり、人間にとつてもつと低次元の、そしてもつとも高貴な反抗である。竟に進歩主義・科学主義を放棄した彼は告白する——「もし未来に対する絶対的な信仰をもっていなかったら……死という観念がわたしのすべての力を麻痺させてしまうことでしよう！」(P. 543) 彼はひたすら安息と救いを求める。それでは、彼は自己の誠実を放棄したのか。レヴィー神父の言う如く彼は「救われた」であらうか——「こうした苦惱に救いをもたらす宗教とは、なんと美しいものであろう！ 宗教ひとり、こうして生きる勇氣とともに

死ぬ勇氣をあたえ、神祕にたいする恐怖をして崇高な魅力あるものとさせ得るのだ……。」(P. 543)

臨終の様子は「然り」の感がある。にも拘わらず著者はこの問題を永遠の疑問として放置するのである。ジャンの死の直後に発見された彼の遺書は、十年前既に老後の心の弱まりを察知して、当時の思想・信念をもつて書かれたものであった。そこには自由主義思想の謳歌と唯物論的・無神論的主張があますところなく語られている。

永劫回帰が「誠実」の宿命である以上、われわれは常に始め直さねばならない。ジャンの死をもつて彼の誠実の問題が終了するのはなく、死によつてこそ新しい懷疑、新しい誠実の問題が提示されるのである。文学的テーマとしての「誠実」は我々の中に問題意識を喚起することによつて、永遠に存続してゆくであらう。

終章

「くすぶつていてもろくそくを消すなよ。……におい、ただけでも、道しるべにはなるのだから……。」(イブセン)

「ジャン・パロワ」の最後の章にかゝげられたこのエピグラフは、「自分自身の手にする光をたよりに」歩んだ主人公ジャンの死を飾るにふさわしいものである。と同時に、「私の全ては『チボー』家の人々」の中にある」と言い切った作家マルタン・デュ・ガールにも併せ贈られるべきであらう。実生活に於いてマルタン・デュ・ガールは、四十年に亘るジッドとの交友関係が如実に示すように、誠実の人であった。病床のジッドをして次のように書かしめた彼であ

る——「彼が居てくれるというだけで、それが私を生命に執着させる。彼は私の精神的、肉体的な要求をすべて察知してくれる。そして、彼が来てくれる前に自分がどんなに力をなくしていても、すぐに、彼の話すことや、私の話に対して彼がもつてくれる愛情のこもった関心などのために私は生き返ったようになる。私は過去に於いて、友情というもの、言いようもないゆかしさをこんなによく感じたことはなし」(Journal: 1949, 27. mai.) また、彼はほど文学的テーマの一貫した作家は稀であろう。彼はデビューした当初から「誠実」のテーマを執念く堀り下げていったのである。彼は、ジッドがむしろ意識的な断絶を計った地点(諷刺精神・無償の行為等)から「実践」に移行してゆく。ジッドに欠けた行動のエネルギーが偏執的な思索に培われて、爆発を生む。マルタン・デュ・ガールのナルシスは、自己を凝視する代りに、自己に似せた塑像を製作するのであるうとさえ思われる。像に生命を吹き込めない悲劇性(人間の限界)の認識が、彼の主人公たちの歩みを全て死への歩みとするのである。

ジャン・パロワに統合された二つの性格——懐疑の人、実践の人——は次の作品「チボー家の人々」に於いて、それぞれ、アントワーヌとジャックとに分立すると考えることができる。もとよりこれはきわめて大まかな解釈であるが、ともあれ「ジャン・パロワ」の意義は、それとして独立するものであるけれども、一貫したマルタン・デュ・ガールの思索の過程に現われた一つの道程として、そして後の大作「チボー家の人々」を生む可能性を孕ませた作品ということであると解すべきであろう。

「ジャン・パロワ」の梗概

この小説は主人公ジャンの伝記的作品である。その生涯は三つの時期に区分され、試みにこれを、懐疑と苦惱の時期、実践の時期、弛緩の時期と呼ぶことができるであろう。

第一期(二十才——三十二才)

母の病をうけ継いで、幼少時より結核患者として登場するジャンは、父(医師)の言葉を守って闘病生活を送る。父は彼に「生きる喜び」と執拗に闘いぬく意志とを教える。一方、祖母の影響によって、彼は熱心なカトリックであり、科学者・無神論者である父を恐怖の気持をもつて眺め、同時に信頼と尊敬を寄せている。闘病を了えた十五才のジャンは、それによつて結果したところの「不屈の意志」を秘めた逞ましい顔立の少年である。彼はジョシュエ司祭一つの質問を呈し、そして宣言する。

——自由思想家とは、正確に言つてどういふものなのでしょうか?

——ぼくは自由思想家になりそうです……

数年後、ソルボンヌに於いて自然科学を修める。彼の目的は、宇宙の複雑さを律する秩序を理解し、その中に神の確実性を証明することにある。年長の親友シェルツ司祭との対話・カトリシズムの矛盾。ジャンはその友人に於いても、「象徴的妥協」をしか認め得ない。彼は落ち着いた信仰を既に失い、全ゆる矛盾を究明したく思う。彼は決心する——前へ進むこと、教義の意味と理性による要求とが相容れる点まで掘りさげてみることに。

父の死。ジャンは死んでゆく父の顔に、生と死の葛藤をみる。「お前は生きている、お前は！」ジャンは声にならない父の声を痛く心に感じる。彼とセシル（代母パ克蘭夫人の娘）とはこの日決定的に愛情を確信し合い、後日結婚することになる。

カトリック系の学校で自然科学の教授となつたジャンは、講義の内容に彼自身の自由な思索を注ぎこむ。生徒は熱心に聴き、彼はそこに生きがいを感じる。しかしカトリシズムに対する彼の疑惑は深まり、最早妥協を許さぬまでに至つてゐる。

授業中、ジャンの講義を見学したミリエル司祭（同学校長）は、彼に婉曲に解任の意を表する。家庭に於いては、ジャンとセシル及びパ克蘭夫人が激論の果てに別離を決意する。

こゝにジャンは自己の信念をもつて、自由思想の実践を目指し行動を開始する。「ぼくの中で一番立派なのは、懷疑にあつての誠実さだ！」

第二期（三十二才——四十五才）

長い屈從生活の後、ジャンは「自由」を謳歌する。同人雑誌「種蒔く人」の発刊。創刊号は彼等の先輩リュス（上院議員・社会主義思想家及び神学批判者）に献げられる。彼等の目的は「資本主義社会制度に対する全般的な攻撃」であり、現実としての自由を獲得することにあり。

寄贈を受けたリュスと主幹ジャンとの最初の対話に於いて、二人は共鳴し合い、リュスは雑誌に寄稿するようになる。一八九六年、

ジャンは、ウォーズマスが秘かに示した書類により、当時売国奴として流刑に処せられていたドレフェス（ユダヤ人）が無罪であることを知る——少くとも罪状に疑いをもつ。書類の執筆者ベルナル・ラザール（實在人物）とリュスとの密会。リュスは自分の地位を利用してドレフェス事件の真相を徹底的に探る。「種蒔く人」の臨時号はドレフェス事件の真相を暴露するに至る。それは嵐の到来であつた。

「種蒔く人」の同人たちによる執拗な戦いが効を奏し、ドレフェス事件再裁判は減刑、執行猶予の段階にまで至る。一応の目的を達した彼らは「大きな歓喜」を味わい、成功を祝い合う。

講演会でジャンは現在のカトリシズムの危機と矛盾を説き、来るべき宗教——というより無信仰の理念を啓発する。それは社会連帯の、科学的知識の地盤に立つ道徳律、愛他本能である。

しかるに数ヶ月後、交通事故に逢つた彼が呟いたことばは、*«Je vous salue, Marie, pleine de grâces...»* という一言であつた。病床について彼は死に直面した時の自分の心を分析し、死に対する恐怖、心の弱まりを覚える。彼は決意し、遺書を作成する——一生をあげての努力が、晩年老衰した際に裏切られることを恐れて、四十を越した今、充分な知的均衡をもつて遺書を記す、云々。彼の遺書には、靈魂不死の否定（即ち無神論的な方向）、科学主義の主張が語られている。

第三期（五十才——死まで）

ゾラの埋葬の日、寄り合つた同人たちには既に嘗ての闘士の面影

はない。彼等は得られた名声にも拘らず、自分たちの任務が終つたこと、それに伴う虚脱感を感じる。深い反省と、若いドレフュス派たちのゆき過ぎに對する嘆き。

パロワ夫妻が別離に際し行つた約束が思い掛けず実現する。即ち娘マリーが十八才になつて父ジャンの許で一ヶ月過すことになる。彼女は熱心なカトリック（修道院に入る決心をしている）で、自由主義者の父の影響下に身を置いて自己を「試煉」するため、自らの意志でやつて来たのである。ジャンは初めその意図を汲むことができず驚くが、マリーに接して父性愛を深める。

パ克蘭夫人（セシールの母）の死。十八年振りでパ克蘭家を訪れたジャンは妻と對面する。気苦労で瘦せたセシールとの和解は、しかし成立しなかつた。

ジャンにとつて「危機の年」が訪れる。彼は衰弱した体を編集室へ運ぶが、若き闘士たちと意見を合わせる事ができない。「でも先生、あなたは何度もわたしの前でそう主張しておいでだったと思ひますが……」彼は「種蒔く人」の主筆をやめる決心をする。リュースとの對話。彼の理性はリュースのそのように強じんではなくなつてゐる——「過去の確信をほとんど肉体的に拒否してしまつてゐるのです。」

ジャンをカトリックに復帰せしめたのは、身心の弱まりとマリーの修道女生活、それにジャンの元の家で知り合つたレヴィー神父の理念である。神父は「種蒔く人」の読者であり、ジャンを深く理解している。神父は次のような台詞を聞かせる。《*Quand il s'agit de la foi, c'est l'affaire du bon dieu. Notre devoir, à*

nous, est d'être sincères.》

ジャンの病は肺結核である。彼は幼少時の闘病生活を回顧して、死への恐怖を新にする。その結果、竟に彼はレヴィー神父の祝福を受けて信仰を得、安堵の氣持にひたる。

一方、リュースの死は人間の理性の謳歌であつた。彼は取り乱すことなく、きわめて平静に死を待ち、死の苦惱に耐えた人であつた。ジャンは、リュースの死の直後、狂氣じみた恐怖感に把えられ、絶叫を残して息絶える。「神さまは、たしかにお許しくださるでしょうか？」

ジャンの死後、レヴィー神父と共にセシールは彼の遺書を発見する。四十才過ぎに書かれた例の力強い遺言である。神父は愕然として、全部読み了ることができない。セシールはその遺書を黙つて火中に投ずる。神父はそれを止めようとしなない。

（一九六〇・三・三〇）